３　次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、いずれも二〇二〇年九月に刊行された書籍『コロナ後の世界』に収められた文章の一部である。これらの文章をよく読んで、後の問いに答えよ。（設問の都合上、原文を一部改めたところがある。）　　　　　　　　　　　　　　　　　　〈佐賀大〉二〇二二年度出題

【文章Ⅰ】

　これまで、新型ウイルスなどの自然物の「不可知性」と、＊新型ＡＩなどの人工物の「不可知性」を、別々の文脈で確認してきた。しかしそれらはすべて、「人間社会の近代化によって人類全体に脅威を与えうるようになった、人類にとって不可知でありうる存在」という点では共通している。この共通点を概念化したものが、本稿の冒頭で登場した〈不可知性〉である。では〈不可知性〉とは、より詳細にはどのように定義できるだろうか。

　そこでまずは、〈不可知性〉に最も近い概念として、ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックが『リスク社会』で定義した「リスク」という概念を紹介し、そのＡ「リスク」との比較によって〈不可知性〉の定義をより明確化してみたい。

　ベックの「リスク」概念は、「近代化（科学技術発展）以前から存在していようといまいと、近代化の結果として、空間的・時間的に無境界・無限定に広まる可能性を得て、その広まりによって人類全体に脅威を与えうる、五感では直接知覚できないもの」として定義できる。＊そしてその典型例として、ベックは「放射性物質（のもつ放射能）」などを挙げている。

　この「リスク」の定義は、新型ウイルスや新型ＡＩを典型例とする〈不可知性〉にも、そのまま当てはまる。しかし、〈不可知性〉の脅威を説明するには、この定義だけでは不十分だ。

　「リスク」の典型例である放射性物質は、たしかに人間の五感では直接に知覚できない。しかし、放射線測定器を用いれば、容易に検出でき、存在を知ることができる。また、放射性物質の性質（放射能）は、生物やウイルスのように突然変異するものではないので、科学的研究によって解明していくことができる。

　それに対して、〈不可知性〉の典型例である新型ウイルスは、潜伏期が長く無症状率が高いため五感では必ずしも知覚できないだけでなく、医学的な検査によっても１００％正確にはその存在を検出できない。また、突然変異によって遺伝情報が大きく変異した場合には、不可知なる新たな性質を得るとともに、検査の検出力も落ちてしまう。

　また、〈不可知性〉のもう一つの典型例である新型ＡＩも、それが学習した特徴量（によって規定される機能）は、そもそも設計者にとってすら理解することが実質的に不可能だし、新たなデータの学習をしてしまえば、さらに不可知なる新たな特徴量（機能）を得てしまう。

　そういう意味で、新型ウイルスや新型ＡＩのほうが、物理化学的な性質が分かっていて検出も容易な放射性物質よりも、人類にとって格段に不可知性が高いのである。

　したがって、「リスク」という概念の定義に、次の条件、つまり、「（たとえば突然変異や特徴量学習などによって生まれる）人類にとって未知の変種が、つねに生まれる可能性があり、かつ、その変種が人間の知りえないところで広まる可能性が常にある」という条件を追加すれば、〈不可知性〉という概念になる。つまり、「リスク」（近代化によって人類全体への脅威となる可能性を得た、知覚できないもの）のうち、「その性質あるいは存在有無が、どの人間にとっても不可知な可能性がある」ものが、〈不可知性〉なのである。

　これまでの人間社会は、近代化のプロセス（世界を可知化するプロセス）のなかで、自然を支配し（可知化し）、ウイルスや細菌などの自然物による脅威を克服し、科学技術を発展させることで、物質的に豊かになってきた。また、近代化が生み出した人工物は、原子力発電技術を含め、人間が設計したもの（完全に可知なるもの）であり、その挙動をコントロールすることが（少なくとも理論上は）可能であるとみなされてきた。

　そのため、近代化が進めば進むほど、「人間社会を乱する要因は、十分に可知化されてきた自然物や、もともと可知な人工物ではなく、いまだに不可知性をんでいる人間（他者）なのだ」とみなされるようになり、「人間の連帯」がめざされてきた。

　とくに第二次世界大戦後は、多くの国々で大規模な工業化と高度経済成長が起こり、近代化が急速に進んだ。するとそれらの国々では、「人間の連帯をめざす」という上述の近代的な規範が普及していった。またそれと同時に、流動的な近代社会のとらえどころのない「現実」を、なんとか意味づけて秩序づけるために、人々は、「現実」と対比的な「非―現実」のイメージ（社会的構築物）を広く共有するようになった。＊そしてその「非―現実」のイメージは、「人間の連帯をめざす」という近代的規範を前提としつつ、Ｂ「理想」（１９４５～７０年頃）から「虚構」（１９７０～９５年頃）へ、そして「不可能性」（１９９５年頃～）へと変遷していった。

　「理想の時代」（１９４５～７０年頃）は、人間全体の連帯を「実現可能な理想」として想定できた時代である。象徴的な出来事は、戦争を防ぐための、国際連合の設立（１９４５年）だ。

　「虚構の時代」（１９７０～９５年頃）は、人間全体の連帯を「実現不可能な虚構」として共有できた時代である。象徴的な出来事は、先進諸国の人々を魅了する虚構としてのアニメーション作品を最も多く生み出したウォルト・ディズニーの理想を具現すべく世界中に設置された「ディズニーランド」のなかで、とくに世界平和を具現化した「It′s a Small World」の設置（１９６６年～）である。実際には戦争は頻発していたが、少なくともディズニーランドを開園できるような「国内の平和」が保たれていれば、「It′s a Small World」の館内では、まるで「世界平和」が実現しているかのような虚構を楽しむことができた。

　「不可能性の時代」（１９９５年頃～）は、人間の連帯について、いかなる虚構も共有できず、その不可能性しか共有できなくなった（と人々が考えるようになった）時代である。象徴的な出来事としては、「東京地下鉄サリン事件」（１９９５年）や「＊コロンバイン高校銃乱射事件」（１９９９年）、「アメリカ同時多発テロ事件」（２００１年）などが挙げられる。「国内に（人間によって引き起こされる）テロや分断が潜在するので、『国内の平和』さえ不可能である」ことが、共通の認識となった。その共通認識を前提に、「テロの予防」や「分断の軽減」が目指された。

　しかし２０２０年ごろから、人間社会は、人間ではなく人間以外の存在によってこそ、大きく攪乱されるようになった。その人間以外の存在というのが、人間社会の近代化によって人類全体に脅威を与えうるようになった、新型ウイルスや新型ＡＩなどの〈不可知性〉である。このような状況になった社会、つまり、人間と〈不可知性〉によって構成される社会が、本稿の冒頭で述べた「〈不可知性〉の社会」なのである。

　「〈不可知性〉の社会」は、人間（の構成する人間社会）と〈不可知性〉とから構成されている。〈不可知性〉の社会において、人間社会を攪乱しうるのは、もはや人間だけではない。人間は、人間社会のうち、自分の力が及ぶ範囲のみを部分的に攪乱しうる。それに対して〈不可知性〉は、空間的・時間的に無境界・無限定に広まり、しかも人類には不可知な部分を含み制御不能なので、人間社会の全体を攪乱しうる。

　この２０２０年に始まった（ように私たちには感じられているが実は新型ＡＩが生まれた２００６年からすでに潜在的に始まっていた）「〈不可知性〉の社会」では、人間社会は――たとえその内部で人間が連帯できてもできなくても――、人間以前の存在（新型ウイルス）や人間以後の存在（新型ＡＩ）の〈不可知性〉によって、その全体を攪乱されうる。つまり「〈不可知性〉の社会」では、〈不可知性〉との共存をめざすことが、人間社会にとって不可欠になるのだ。

（柴田悠「〈不可知性〉の社会」による）

注　新型ＡＩ……ここでは、ＡＩ（人工知能）のうち、２００６年に発明された深層学習（ディープ・ラーニング）型のＡＩを指す。

　　そしてその典型例として、～……原文の注に「放射性物質は、近代化以前から自然界に存在するが、近代の科学技術によってその性質（放射能）が強まりうることにより、それによって人類全体の脅威となりうる」とある。

　　そしてその「非―現実」のイメージは、～……原文の注に「大澤真幸『不可能性の時代』（岩波書店、２００８年）」とある。

　　コロンバイン高校銃乱射事件……アメリカで起きた学校内銃乱射事件。

　【文章Ⅱ】

　われわれは今、終わりなき終わりの時代を生きている。

　新型コロナウイルスの急速な延を通じて、人類は一瞬、終わりを見た――あるいは見つつある。終わりはこんなふうにやってくるのではないか、と。世界の終わり、人類自身の終わり、あるいは資本主義の終わりは……。

　現在、われわれの最も切実な問いは、こうであろう。この状況はいつ終わるの？　終わりと隣接しているこのような状況は、いつ終わりを迎えるのか？　この問いに対する最も誠実な答えは、「これは終わらないだろう」である。

　まず、この新型コロナウイルスに限っても、小康的な時間を挟みつつ、第二波、第三波の感染の流行が襲ってくるだろう。さらに、新しいウイルスは、現在の新型コロナウイルスで終わるわけではない。第二、第三のウイルスが人間社会に侵入してくる可能性が高いと考えなくてはならない。というのも、現代社会は――グローバル化した資本主義社会は――、新しいウイルスに対して二つの意味でだからだ。第一には、開発が進み、人間が住む世界が野生動物の世界に接近し、両者の間のアカンショウ地帯が著しく小さくなったこと。第二に、人間の移動が頻繁になり、ウイルスの感染の速度が著しく大きいこと。このように推論を拡張していくと、ひとつのことに気づく。現在のコロナ禍は、人新世に固有な現象の一部と解すべきだということに、である。

　人新世とは、地球の生態系の基本的な性格を規定するほど、人類の活動の影響力が大きくなった時代を指すのに、専門家たちが使っている用語である。いつからが人新世であったのかは個々の専門家によって見解が分かれる。たとえば産業革命以降とする者もあれば、二〇世紀末期以降とする者もあり、さらには農業を始めてからとする者さえもいる。人新世がいつからかはここでは重要ではないが、われわれはこの概念が説得力をもつ時代、この概念の意味を実感できる時代を生きていることは間違いない。人新世には次のような逆説がある。

　人新世とは、自然が人間と相関的であるということが、認知的な意味だけではなく、イソクブツ的な意味をもつようになった、ということである。つまり人間は、十分に強力になり、自らの生の基本的な条件となるような自然にまで影響を与えるようになったのだ。いまや、人間や社会にとって完全に外的な環境としての自然なるものは終わった（自然の終）。このとき逆に、人間は、自らが、地球という小さな天体の環境条件を究極的には受け入れるほかない一つの動物種であることを自覚させられることになる。つまり人間は、自然を征服したときに、逆に、自然に規定された弱い動物種であることを自覚した。というのも、自らの活動によってもたらした自然の変化を、人間は制御することができず、以前より一層大きな――あるいは以前にはなかったような――大きな損害を被ることになるからだ。地球の温暖化も、海面の上昇も、そして超大型の台風等の異常気象も、すべてそうした現象に含まれる。

　そして、グローバル資本主義の野生領域への侵出が、人類のウイルスへの脆弱性の原因になっているとすれば、新型ウイルスの感染症の拡大もまた、人新世の逆説のとりわけウセンエイな現れのひとつと見ることができる。そうだとすると、「この状況はいつ終わるのか？」という質問はナンセンスだ。「この状況」が、この目下のウイルス禍を一部に含む人新世的な社会変動の全体だとするならば、そして、「終わる」ということがこのウイルス禍が起きる前の世界への復帰を意味しているのだとすれば、「この状況」が「終わる」ということはもはやないからだ。仮に、現在の新型コロナウイルスの脅威は、たとえばワクチンや治療薬の発明などによって取り除かれたとしても、人新世に規定された危機がつねに潜在している。

　だから、われわれは終わりなき終わりの時代を生きることになる。こう主張するとき私は、＊宮台真司が四半世紀前の地下鉄サリン事件の後、オウム真理教の信者とその＊シンパに対して言ったスローガン、「終わりなき日常を生きろ」が念頭にある。オウム信者は、終わりの幻想に魅了されていた。それに対して、宮台は、華々しい終わりなどはやってこない、終わりなき日常を生きるべきだ、と説いたのだった。かつては、終わりというものは一瞬のうちに到来するものであり、日常は終わりがないのが当然だった。だが、今後、われわれが生きるのは、「終わり（に隣接する時間）」が終わらない、という状況である。つまり日常こそが「終わり」の時間だという状況である。すると、現在さかんに唱えられている「新しい日常」という語は、不吉な響きをエトモナっていることに気づく。それは、終わりなき終わりの言い換えではないか、と。

　「この状況がいつ終わるのか？」と問うとき、人は、まだその「終わりなき終わり」を否認し続けている。この運命を受け入れてはいないのだ。それも当然であろう。この「終わり」が終わらないのだとすれば、まったく希望がない、と言っているに等しいのだから。希望をもつためには、この終わりがいつか終わると想定しないわけにはいかない。

　だが、そうだろうか。終わりなき終わりを直視することは、希望をもてない、ということなのか。そうではない。あえて誤解を恐れずにいえば、ほんとうの希望をもつためには、むしろいったん絶望しなくてはならない。終わりをいったんはっきりと認めなくてはならない。逆説的な言い方になるが、Ｃ真正の終わりを乗り越え、さらなる希望をもつ唯一の方法は、終わりの不可避性を受け入れることである。

　そのように考える根拠は、＊エリザベス・キューブラー・ロスが『死の瞬間』で述べていることである。この本によると、末期など死が確実な病を得ていることを告知された患者は、最終的に死の事実を受け入れ、覚悟を決めるまでに五つの精神のステージを歩む。最初、患者は、事実を単純に拒否し、「否認」する（「そんなことが私の身に起こるはずがない」）。その後、「怒り」の段階（「どうして私がこんな目に合わなくてはならないんだ」）等を経て、最後の第五段階において、人は、死を真に「受容」する。キューブラー・ロスによると、死だけではなく、人生におけるさまざまな不幸や破局に対する態度においても――たとえば失業や破産や失恋などに関しても――、人は同じステップを歩む。

　ここで重要なのは、第五段階の死の「受容」である。このとき人は、単純に希望を失い、不活性になるわけではない。そのような状態は、一つ前の第四段階、「抑鬱」と名付けられた段階においてやってくる。第五段階では、人は、むしろ死の運命に対して前向きである。来るべき死に対して準備をするようになるのは、この段階に達したときだ。要するに、この段階に至ってはじめて人は、死という破局に対して、それまでよりも高い精神的な境地に到達するのである。

　同じことは、現在のコロナ禍にも言えるのではないか。この危機を乗り越えるためには――人新世というコンテクストの中でこの危機を乗り越えるためには――、われわれは、生活様式も社会構造も、そして（社会的に容認されている）テクノロジーに関しても、これまでの価値観や想定を否定するような、根本的な変更を必要とする。つまり、これまでの価値観を相対化するような精神的な境地に立つ必要がある。それをなしうるのは、キューブラー・ロスのいう第五の段階に達したときのみである。つまり、破局（終わりなき終わり）を不可避の運命として、いったんは完全に受け入れる必要がある。

　キューブラー・ロスの図式を適用したとき、実際のわれわれは今、どのステージにいるのか。「否認」「怒り」に続く第三のステージ、ちょうど真ん中の段階にあたる「取引」が、われわれの現状である。これは、運命との取引によって、破局（死）の意味を小さくしたり、破局を延期できないか無駄にあがく段階である。現在、われわれは、在宅勤務の比率を増やすとか、できるだけマスクをつけるとか、食事中のおしゃべりを減らすとかといった程度の犠牲で手を打ってくれないか、と運命と交渉している最中だ。しかし、この程度のことで運命は譲歩してはくれないだろう。なぜならば、問題は、このウイルスだけではないからだ。

（大澤真幸「もうひとつ別の経済へ」による）

注　宮台真司……社会学者。

　　シンパ……支持者。シンパサイザー（sympathizer）の略。

　　エリザベス・キューブラー・ロス……アメリカの精神科医。

問１　二重傍線部ア～エのカタカナを漢字に直せ。

問２　【文章Ⅰ】は意味の上から二つの部分に分けることができる。後半部のはじめの十字を抜き出せ。

問３　傍線部Ａについて、「リスク」と〈不可知性〉の⑴共通点と⑵相違点をそれぞれ簡潔に説明せよ。

問４　傍線部Ｂについて、次の⑴⑵に答えよ。

　　⑴　「「理想」から「虚構」へ、そして「不可能性」へと変遷していった」とはどのようなことか。本文中の語句を用いて説明せよ。

　　⑵　筆者がそのような変遷を取り上げているのはなぜか。【文章Ⅰ】の趣旨を踏まえて答えよ。

問５　傍線部Ｃについて、「終わりの不可避性を受け入れる」とはどういうことか。「人新世」という語句を含めて七十字以上九十字以内で説明せよ。

◎ 問６　【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、ともにコロナ後の世界における人間の生き方を論じているが、論述の視点には違いがみられる。どのような違いがみられるか、次の条件①～③を踏まえて分かりやすく記述せよ。

　　　条件①　おのおのがどのような視点に立ち、何を主張しているのかを明確にすること。

　　　条件②　おのおのの視点を対比させ、その違いが明確になるように書くこと。

　　　条件③　次の語群から一つ以上を適切に使うこと。

　　　〔語群〕空間、社会、自然、グローバル化、希望、精神

【解答と採点基準】

問１　ア＝緩衝　　イ＝即物　　ウ＝先鋭　　エ＝伴

問２　これまでの人間社会は

問３　⑴＝Ａ近代化の結果、Ｂ時空を越えて無限定に広がって Ｃ人類全体に脅威を与える可能性を持ち、Ｄ人間の五感では知覚不能である点。

Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝３〔「近代の科学技術の発展がもたらした結果」でも可。〕

Ｂ＝２〔「空間的・時間的に無境界・無限定に広まる可能性」という内容であれば可。〕

Ｃ＝２〔「人類全体に脅威を与える」という内容であれば可。〕

Ｄ＝３〔「人間には直接知覚できない」という内容があれば可。〕

　　　⑵＝Ａリスクは科学的研究で解明できるが、Ｂ〈不可知性〉はその性質も存在の有無自体も、新たな可能性も不可知でありうるという点。

Ａ・Ｂがそろっていなければ全体０。

Ａ＝４〔リスクの特徴の説明。「（人間の五感では知覚できないが、）科学的研究によって存在を確認できる」という内容であれば可。〕

Ｂ＝６〔〈不可知性〉の特徴の説明。「性質」「存在の有無」「新たな可能性」という内容のいずれかが欠けている場合は、それぞれ減点２。〕

問４　⑴＝Ａ人間全体の連帯について、Ｂ実現可能な理想として想定していた時代から、Ｃ実現不可能な虚構として共有した時代、Ｄ不可能性しか共有できなくなった時代へと移り変わったということ。

Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄがそろっていなければ全体０。

Ａ＝３〔「人間全体の連帯」は必須。〕

Ｂ＝２〔「人間全体の連帯を実現可能な理想として想定できた」という内容であれば可。〕

Ｃ＝２〔「人間全体の連帯を実現不可能な虚構として共有できた」という内容であれば可。〕

Ｄ＝３〔「人間全体の連帯について、いかなる虚構も共有できず、不可能性しか共有できなくなった」という内容であれば可。文末に「移り変わった」などの表現がなければ減点１。〕

　　　⑵＝Ａこれまでは社会の攪乱を防ぐために人間の連帯をめざしてきたが、Ｂ現在では、人間が制御できない人間以外の存在による不可知性によって世界が攪乱されうることを指摘し、Ｃ今後はその不可知性との共存が不可欠であることを示すため。

Ａ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝４〔「これまで」や「以前は」という表現と「人間の連帯をめざしてきた」という内容は必須。「社会の攪乱を防ぐため」という内容がなければ減点２。〕

Ｂ＝３〔「現在の不可知性」の要因の説明。「人間が制御できない（存在）」「人間以外の存在」のどちらかが欠けている場合は減点２。〕

Ｃ＝３〔「不可知性との共存が不可欠」という内容は必須。〕

問５　Ａ人間が地球の生態系に強い影響を与え、Ｂ自然が制御不能になった人新世において、Ｃこれまでの人類の価値観や想定を否定するような破局の到来を受け入れた後 Ｄより高い精神的境地に達するということ。（90字）

Ｂ・Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔「人間による自然環境や生態系の破壊」という内容があれば可。〕

Ｂ＝２〔「想定外の損害を被ることになった時代」という表現の場合は減点１。〕

Ｃ＝３〔「人類の価値観や想定を否定するような」、または「根本的な変更を必要とする」という内容がなければ減点２。「破局を受け入れる」という内容は必須。〕

Ｄ＝３〔「高い精神的な境地」という内容は必須。〕

問６　Ａ【文章Ⅰ】では、人間社会の近代化によって、人類は人工物や自然環境という人間以外の存在の〈不可知性〉の脅威に直面しているという視点に立ち、Ｂその〈不可知性〉との共存が不可欠だと主張している。Ｃ一方、【文章Ⅱ】では、人類が地球の生態系に強い影響を与える人新世において、人間や社会にとって外的な環境としての自然が終焉し、危機が常に潜在しているという視点に立ち、Ｄその終わりなき終わりを受け入れて絶望し、その後により高い精神的境地に到達することでしか、真の希望を見出しうる道はないと主張している。

Ａ＝２〔「人工物や自然環境」「人間以外の存在」がなければ、それぞれ減点１。「〈不可知性〉の脅威に直面している」という内容は必須。〕

Ｂ＝３〔「〈不可知性〉との共存」は必須。〕

Ｃ＝２〔「人間にとっての外的自然環境が終焉し、危機が常に潜在している」という内容は必須。〕

Ｄ＝３〔「終わり（破局）を受け入れて絶望し」「高い精神的境地に到達し」「真の希望を見出す」という三つの要素は必須。〕